

田原本町埋蔵文化財調査概要 第14集

唐古・鍵遺跡

第56次発掘調査概報

2022

田原本町教育委員会

例 言

1. 本書は田原本町教育委員会が平成6年度に通学路改修事業に伴う事前調査として実施した、奈良県磯城郡田原本町大字唐古及び鍵に所在する唐古・鍵遺跡の発掘調査概報である。
2. 調査は、平成6年11月17日から7年1月25日までの期間で実施した。現地調査は文化財保存課 藤田三郎・清水琢哉があたった。
3. 発掘調査の作業及び補助には以下者があたった。
[現地調査]
中谷義弘、植中次郎、谷昭男、南治、中村高幸、木下博、山本由美子、山澤節子、ヤマショウ（4人）、八木健一郎（奈良大学）
4. 本書の執筆・編集は清水があたった。

目 次

I. はじめに	
1. 周辺の遺跡と立地環境	1
2. 唐古・鍵遺跡の概要	3
3. 周辺の調査成果	4
II. 発掘調査の成果	
1. 調査の方法と経緯	9
2. 基本層序	11
3. 検出した遺構	13
4. 出土した遺物	23
III. まとめ	27
写真図版	28

I. はじめに

1. 周辺の遺跡と立地環境

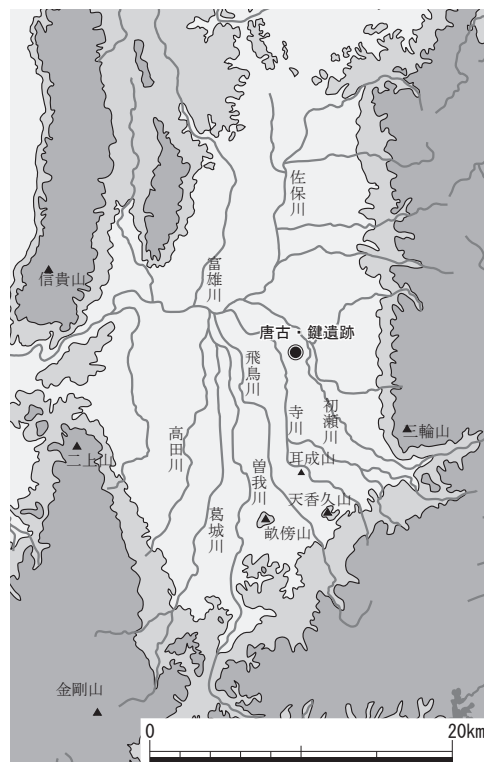
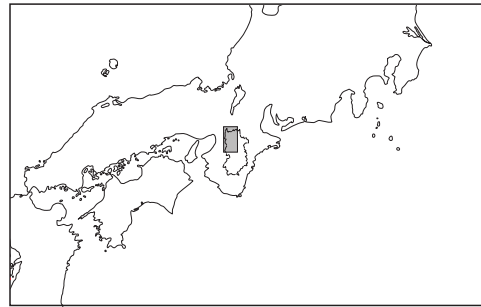
唐古・鍵遺跡は、奈良盆地のほぼ中央、標高 47 m 前後の沖積地に位置する。東側には初瀬川が、西側には寺川がそれぞれ北流する。これらの河川は奈良盆地中央で合流して大和川となり、生駒山系と葛城山系に挟まれた「亀の瀬」を抜けて大阪湾へと流れる。

奈良盆地では、盆地西側の二上山麓などで旧石器時代の遺跡が確認されているが、盆地中央の低地部では縄文時代早期頃とみられる有舌尖頭器が単独で検出される程度で、縄文後期頃まで明瞭な人の生活痕は確認できない。縄文後期になると、保津・宮古遺跡や秦庄遺跡などで遺構と遺物が散見されるようになる。この時期は平野部でも小高い土地を選んで居住が始まった段階とみることができよう。この状況は縄文時代晩期頃までつづく。

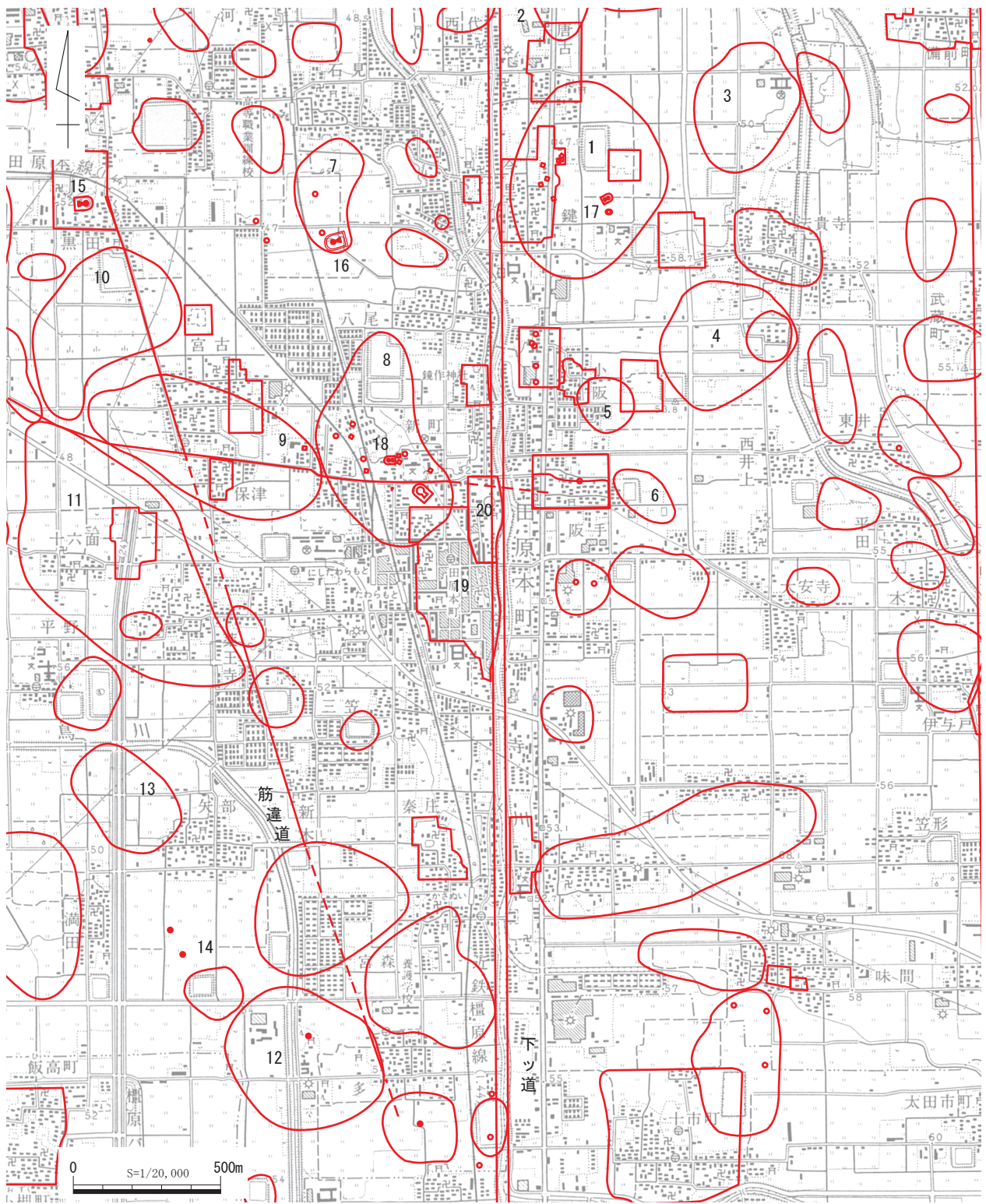
弥生時代に入ると、盆地低地部でも本格的な定住がはじまる。田原本町内では唐古・鍵遺跡と保津・宮古遺跡で弥生時代前期前半の遺構・遺物が確認されている。このほか、多遺跡、十六面・薬王寺遺跡などでも弥生時代前期の遺構・遺物を確認している。弥生時代を通じて遺跡数は徐々に増加し、古墳時代前期までは基本的に弥生時代以来の集落が継続する傾向がある。

古墳時代前期末には、羽子田遺跡で前方後円墳とみられる墳墓が築造され（羽子田 3 号墳）、唐古・鍵遺跡でも前期末の円筒埴輪等が出土していることから付近で同時期の古墳が築造された可能性がある。また、古墳時代後期になると、田原本町北西部から隣接する三宅町にかけて三宅古墳群が形成される。黒田大塚古墳・笹鉾山 1 号墳はいずれも三宅古墳群に属する前方後円墳である。古墳時代中・後期には、多遺跡、十六面・薬王寺遺跡などでまとまった集落が確認されている。

古代になると、田原本町周辺は筋違道と中ツ道・下ツ道が通る交通の要衝となり、保津・宮古遺跡付近では墨書土器や円面硯が出土するなど官衙にかかわる可能性がある遺構・遺物が確認できるようになる。また、町北端の清水風遺跡付近では奈良時代ごろの製塩土器が多数出土しており、下ツ道と初瀬川水運が交わる交通上の要衝となっていた可能性がある。



第 1 図 唐古・鍵遺跡の位置

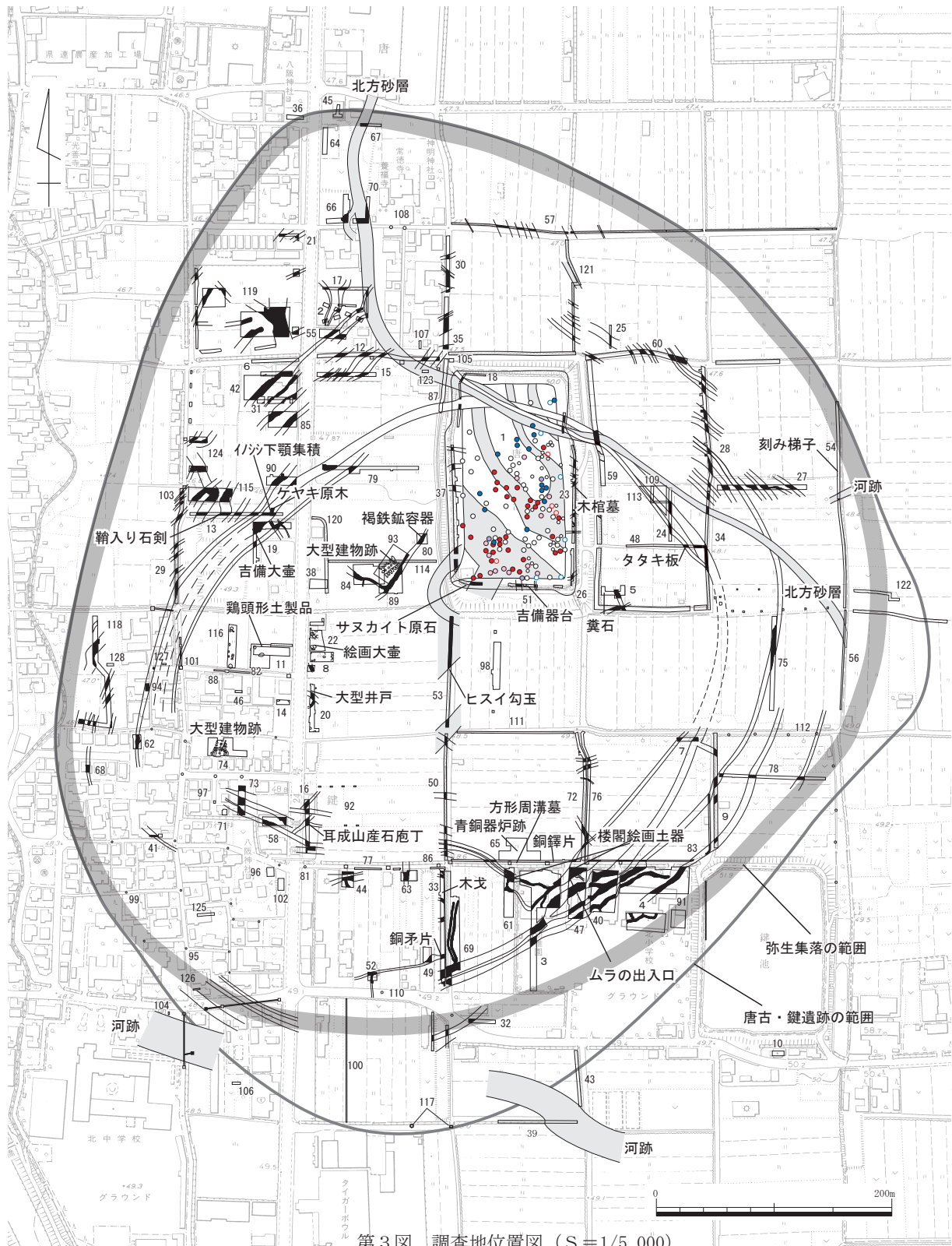


遺跡名	時代	遺跡名	時代	遺跡名	時代
1 唐古・鍵遺跡	弥生～中世	9 保津・宮古遺跡	弥生・古墳	17 唐古・鍵古墳群	古墳
2 法貴寺北遺跡	弥生・中世	10 宮古北遺跡	弥生～古代	18 羽子田古墳群	古墳
3 法貴寺遺跡	中世	11 十六面・薬王寺遺跡	弥生～中世	19 寺内町遺跡	中世・近世
4 法貴寺齋宮前遺跡	弥生～中世	12 多遺跡	弥生～中世	20 平野氏陣屋跡	中世・近世
5 小阪細長遺跡	弥生・古墳	13 矢部遺跡	弥生～中世		
6 阪手遺跡	弥生・古代	14 団栗山古墳	古墳		
7 八尾九原遺跡	弥生・中世	15 黒田大塚古墳	古墳		
8 羽子田遺跡	弥生～近世	16 笹鉾山1号墳	古墳		

第2図 田原本町周辺の遺跡

2. 唐古・鍵遺跡の概要

唐古・鍵遺跡は、奈良盆地のほぼ中央に位置する弥生時代の代表的な環濠集落である。標高47 m前後の沖積地に立地し、東側には初瀬川が、西側には寺川がそれぞれ北流する。遺跡は両河川の間形成された微高地上に立地する。



唐古・鍵遺跡の調査の歴史は古く、高橋健自が1901年に「鍵地区の遺跡」として学会で紹介して以降、戦前に鳥居龍三や森本六爾らが小規模な調査を実施し、弥生時代の遺跡として知られるようになった。昭和36・37年に国道新設工事に伴って唐古池の底の土取りをおこない、これに対応するための発掘調査を奈良県と京都大学が共同で実施した。この調査の結果、膨大な土器や木製農耕具・石器などの出土品から、弥生時代が農耕を主な生業としていた時代であることが裏付けられるなど、学史上極めて重要な成果が得られた。また、刊行された報告書「唐古弥生式遺跡の研究」で示された弥生土器編年は、近畿地方の弥生土器研究の基礎となった。

その後の発掘調査により、遺跡が田原本町大字唐古だけでなく大字鍵にも広がることが判明し、遺跡名も唐古・鍵遺跡へとあらためられた。調査の結果、遺跡面積42ヘクタールの大規模な環濠集落であることが明らかとなった。その中心部約10ヘクタールは平成11年に史跡指定を受け、平成30年4月から史跡公園としての供用が開始された。

3. 周辺の調査成果

唐古・鍵遺跡東端付近では、第56次調査を実施した平成6年の時点で第24・27・28・34・54次調査を実施し、遺跡北東部には南東―北西方向の大溝が複数存在する「環濠帯」が広がることが想定されていた。そして、環濠帯の北東側にあたる第54次調査では、河跡状の堆積を確認し、環濠帯の外側に氾濫原が広がる状況が推定されるとともに、付近が遺跡の北東限となる可能性が考えられた。

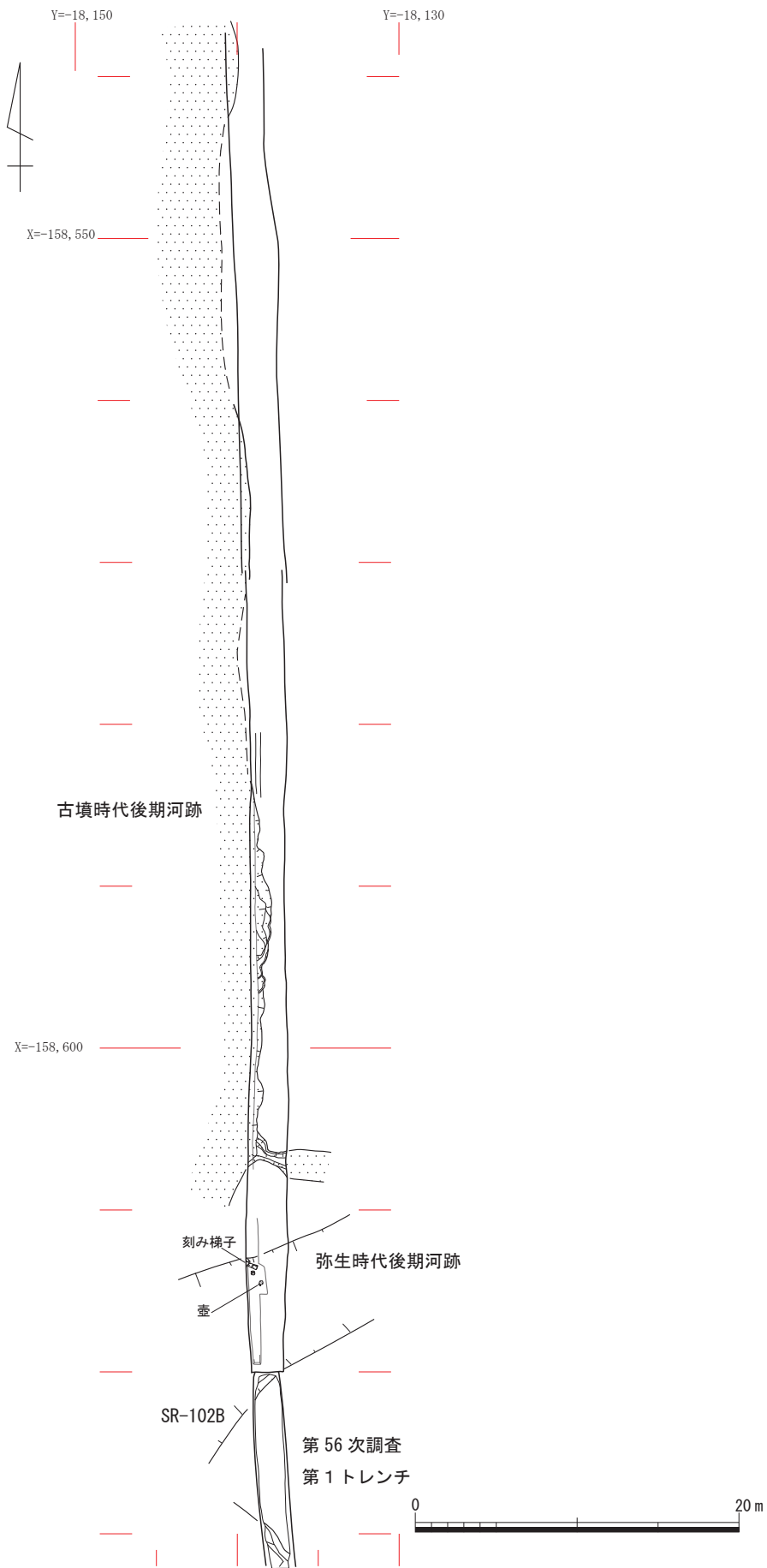
その後、第60・75・122次調査を実施したことで、遺跡東端の状況がより明瞭となり、第56次調査の時点では一連の河跡と解釈していた各遺構について、大溝等の人為的遺構である可能性も検討する必要がある。出てくる。

唐古・鍵遺跡第54次調査では、調査区西端で南北方向に近い古墳時代後期～飛鳥時代頃の河跡1条を検出したほか、調査区南側で北東―南西方向の弥生時代後期の河跡の北肩を検出している。この河跡については、本書で報告する第56次調査のSD-102Bと同一の遺構であり、第56次調査の結果、深さ1m、幅8mであることが確認された。本報告と密接に関係する遺構であることから、第54次調査の検出した遺構と遺物については図化できる情報を示す。

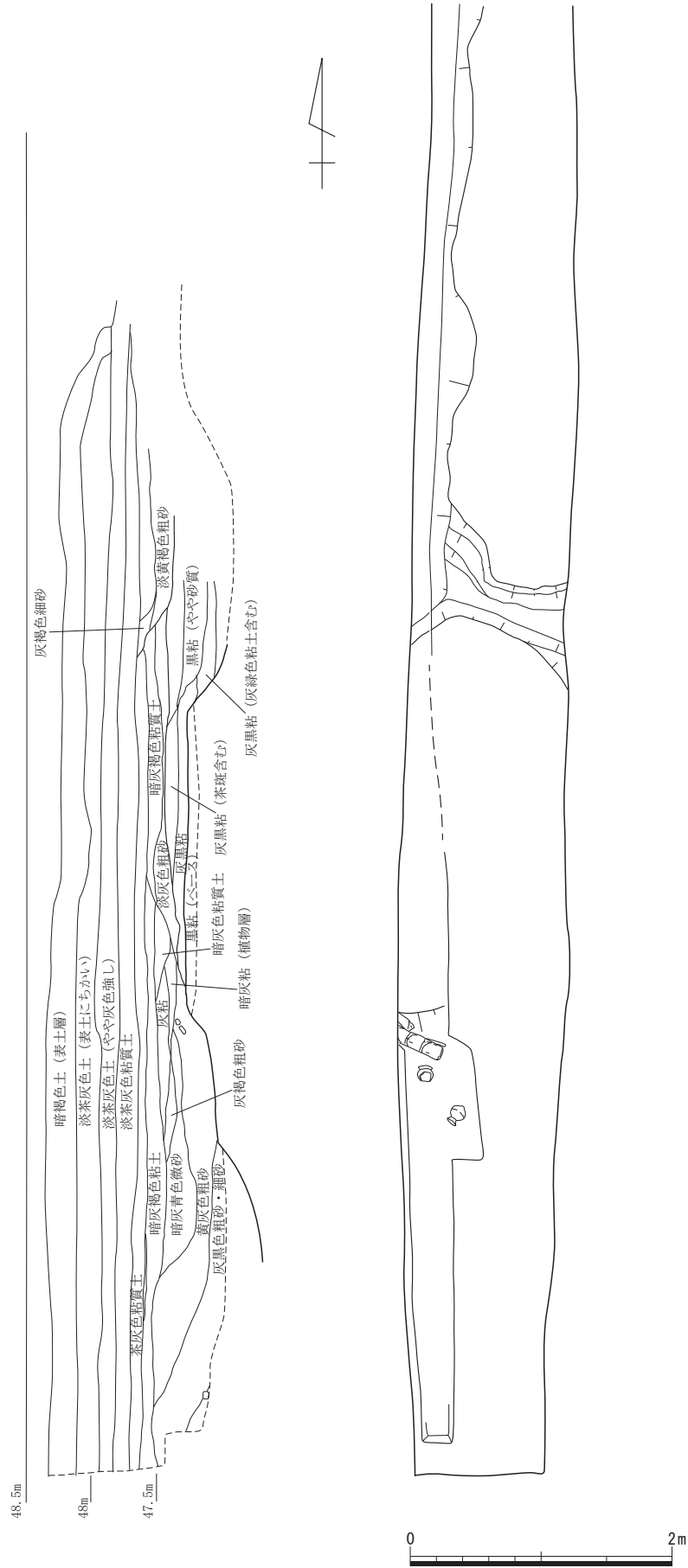
第54次調査の後期の河跡からは、刻み梯子と柱材が出土したほか、ほぼ完形の壺1点が出土している。梯子は全長118.5cmで、下端は表面側を削って尖らせている。柱材は、全長377cmで、下端と上端が尖る。下端から50cm程度で表面の腐食状況が異なることから、この部分が地面に埋まった状態で使用されていた可能性がある。材質はクヌギである。共伴した壺から、弥生時代後期の遺構・遺物と考えられる。



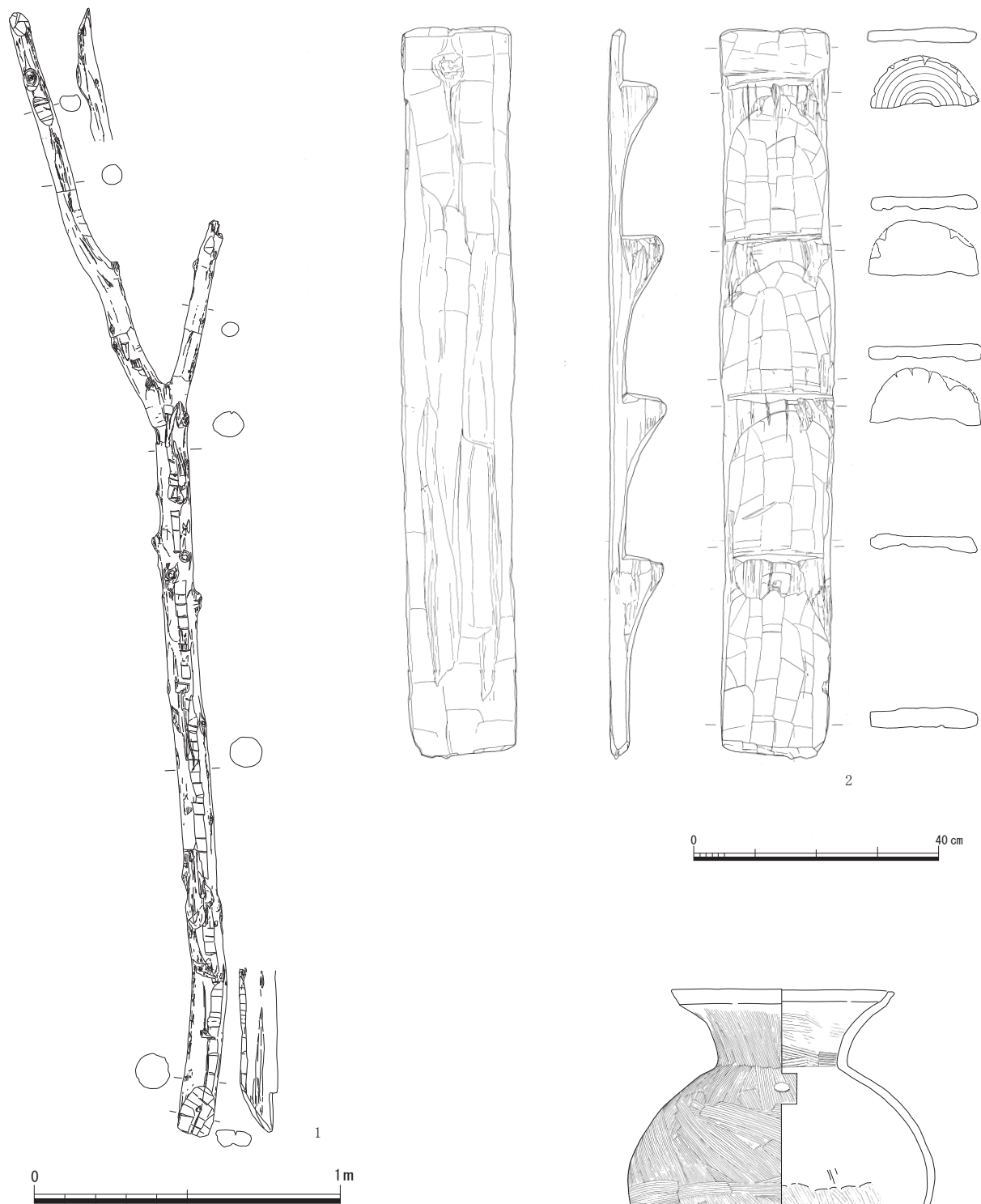
第4図 調査地周辺の調査成果 (S=1/2,000)



第5図 第54次調査の遺構 (S=1/400)



第6図 第54次調査 河跡 (S=1/50)



- 1. 柱 (S=1/20)
- 2. 梯子 (S=1/10)
- 3. 広口壺 (S=1/4)

第7図 第54次調査出土遺物

Ⅱ. 発掘調査の成果

1. 調査の方法

本書で報告する第56次調査は、遺跡東端で平成5年度～6年度に実施した通学路整備事業に伴う事前調のうち、平成6年度に実施した事業に伴う調査である。この通学路整備事業は、遺跡東端の南北300mを対象としており、北側100mを平成5年度に54次調査として調査し、残る南側200mを平成6年度に第56次調査として調査をおこなった。

平成6年度の調査は、調査対象範囲が総延長180mに及び、工事区分の都合から2区に分けて実施した。現地調査は、11月17日～12月5日に北半の第1トレンチの調査をおこない、この工区竣工後の翌年1月18日～1月25日に南半の第2トレンチの調査をおこなった。ただし、第Ⅱ区の堆積土層は脆弱で、そのうえ直前に行われた道路東側擁壁工事の掘り肩から30cmのところに調査区を設定したため、各所で壁面の崩壊を招いた。そのため、Ⅱ区での調査は断面観察が中心となった。

調査回数	所在地	原因	地目	土地所有者	調査期間	調査面積
56次	法貴寺1085番2 外東側道路	通学路整備	道路	田原本町	1994. 11. 17 ～ 95. 1. 25	330 m ²



第1トレンチ作業風景（北から）



第2トレンチ作業風景（南から）

唐古・鍵遺跡第56次調査 調査日誌抄

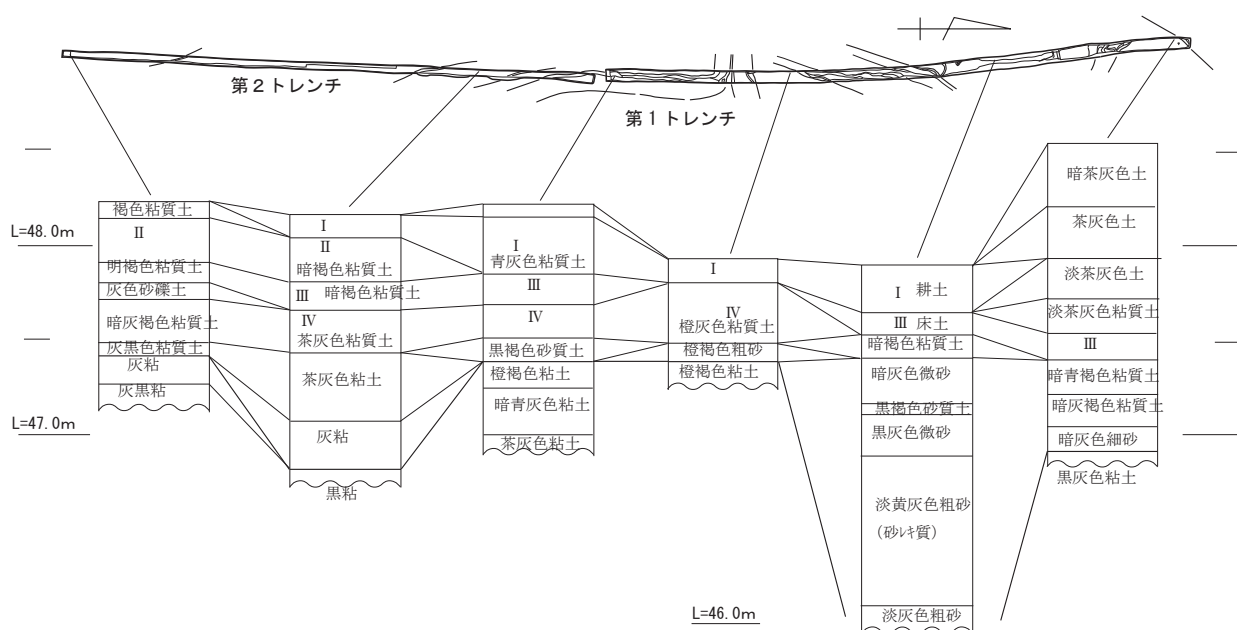
- 1994年11月17日(木) 調査区設定・I区北部の表土掘削。北部の検出と写真。古墳時代の河跡(SR-101)と、弥生時代中～後期の河跡群(一連とみられるためSR-102A～とする)を検出。
- 11月18日(金) I区中央の表土掘削、15時で降雨中止。
- 11月21日(月) 重機中止、北部～中央の遺構掘削開始。
- 11月22日(火) 午前は重機なし、北半の遺構掘削。午後から重機での表土掘削(南端まで)。
- 11月24日(木) 北部～中央の遺構掘削。南端の層序確認作業等。
- 11月25日(金) 重機での廃土移動作業、I区南端の土器出土状況写真・図化
- 11月28日(月) 第2土器群の写真・図化、取り上げ。
- 11月29日(火) 北部の遺構掘・完掘。
- 11月30日(水) 中央～南部の遺構ほぼ完掘。
- 12月1日(木) 全景写真・遺構図作成。SR-102Bの南肩確認。
- 12月2日(金) SR-102Bの北肩・南肩を掘鑿・確認。
- 12月3日(土) 作業員なし。遺構平面図・層序図の作成。
- 12月4日(日) 作業員なし。午前のみ実測作業。
- 12月5日(月) 作業員1名の補助でレベル入れ(半日)。I区調査完了。
- 1995年 1月18日(水) II区の表土掘削。幅1.2m。中央～南半はシルト質の軟弱地盤。
- 1月19日(木) 清掃・検出。雨のため東壁の一部崩落。検出写真撮影。壁面補強。
- 1月20日(金) SR-102F、SR-102E(続き)の中層まで掘削・清掃・写真。
- 1月23日(月) 層序確認、SR-102F等の最下層確認。
- 1月24日(火) 前日に分層した壁面で崩落多数。崩落土撤去作業、全景写真。撤収作業。平面図は平板にて作成。
- 1月25日(水) 層序図化、座標値の測量。

2. 基本層序

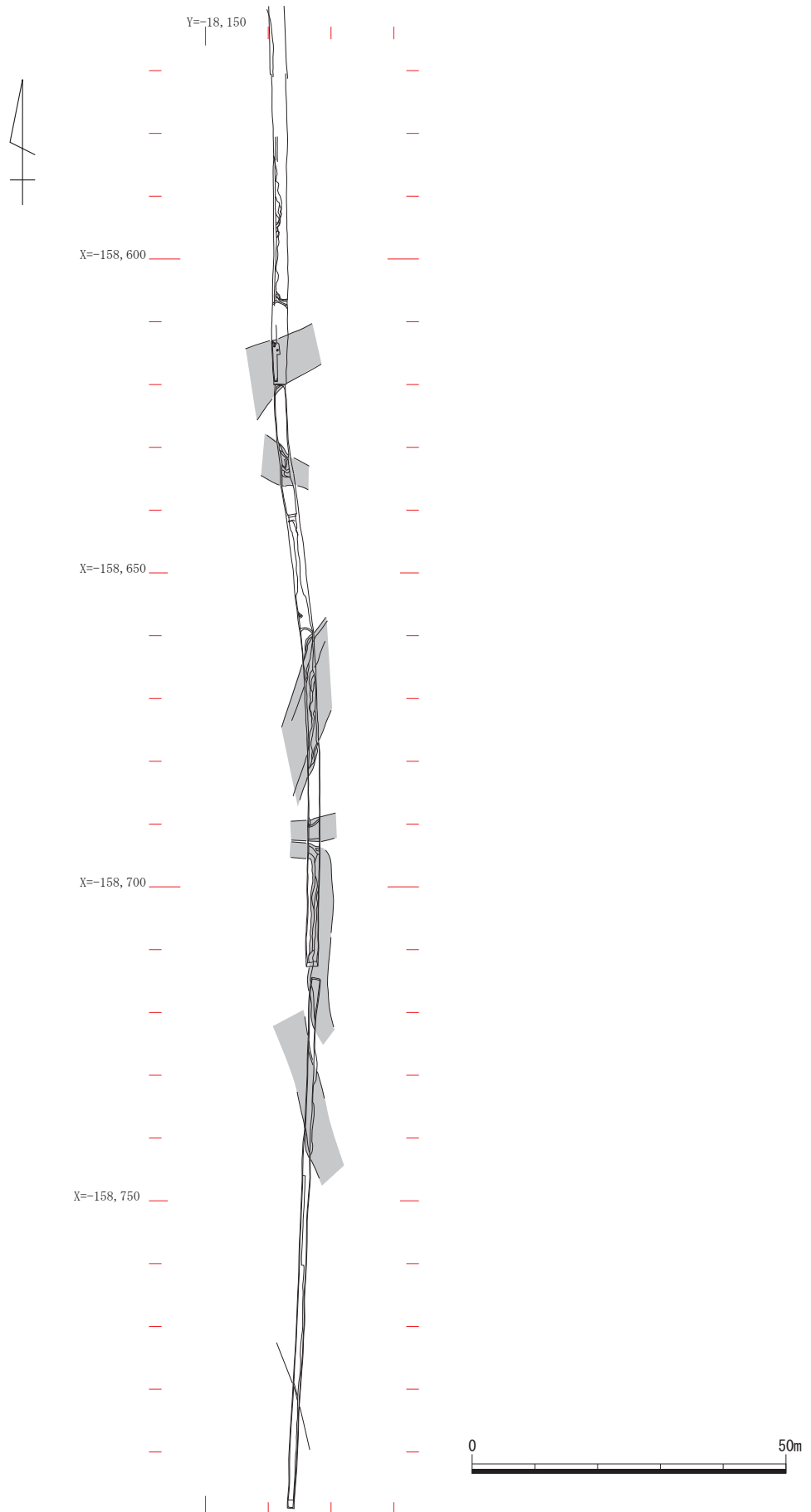
先述のとおり、調査区は南北 180 m に及び、地点により基本となる層序は大きく異なる。ここでは、第 1 トレンチ中央南付近、SR-102C 北肩付近の層序を代表として示す。

第Ⅰ層：暗青灰色粘質土	検出標高 47.9 m (水田耕土)
第Ⅱ層：暗褐色粘質土 (砂質)	検出標高 47.7 m (同 床土 1)
第Ⅲ層：橙灰色粘質土	検出標高 47.5 m (同 床土 2)
第Ⅳ層：暗灰褐色砂質土 (粗砂混)	検出標高 47.4 m (中世包含層)
第Ⅴ層：淡青灰色微砂	検出標高 47.2 m (弥生時代中期以前の堆積)
第Ⅵ層：黒褐色粘土	検出標高 46.9 m (弥生時代以前の堆積)
第Ⅶ層：黒色粘土	検出標高 46.6 m (ベース)

第Ⅰ層から第Ⅳ層までは中世以降の堆積と考えられ、0.7 m の厚さを測る。第Ⅴ層は弥生時代中期までに形成された堆積層とみられ、前期以前の流路がこの層の下に形成される。第Ⅵ層以下は弥生時代以前に形成された土層堆積であることから、土器を全く包含していない。弥生時代～古墳時代後期の河道は第Ⅳ層と第Ⅴ層の間に形成される。



第 8 図 第 56 次調査 基本層序 (柱状図は 1/40)



第9図 第56次調査 調査区の設定 (S=1/1,000)

3. 検出した遺構

調査地全体に洪水砂で埋没する遺構が広がっていた。

弥生時代前期の遺構

SR-201 I区北半で検出された、深さ2m以上の北東-南西方向の河跡である。調査区では幅20.7mにわたって検出した。崩壊の恐れがあり、完掘できなかった。遺物は、上層の黒褐色粘質土（微砂質）層から太形蛤刃石斧と若干の土器片が出土している。下層の砂層からは遺物は出土していない。

SR-202 II区南半で検出された河跡である。南端のみ検出したが、壁面の崩壊が激しかったため未調査である。

弥生時代中・後期の遺構

調査後の検討で、今回検出した弥生時代後期初頭の遺構群は同時期の洪水堆積で埋没していることから、一連の河跡とその支流という解釈に基づき、SR-102A～SR-102Fという遺構名が与えられた。ただし、その後の調査が進んだ現在の知見では大溝とすべき遺構も河跡扱いしている可能性があり、今後検討すべきところである。

SR-102B 調査区北端で検出した河跡である。第54次調査南端で検出した河跡の南肩となる。この結果、第54次調査で梯子等が出土した遺構の幅を押さえることができた。幅は約8mとなる。

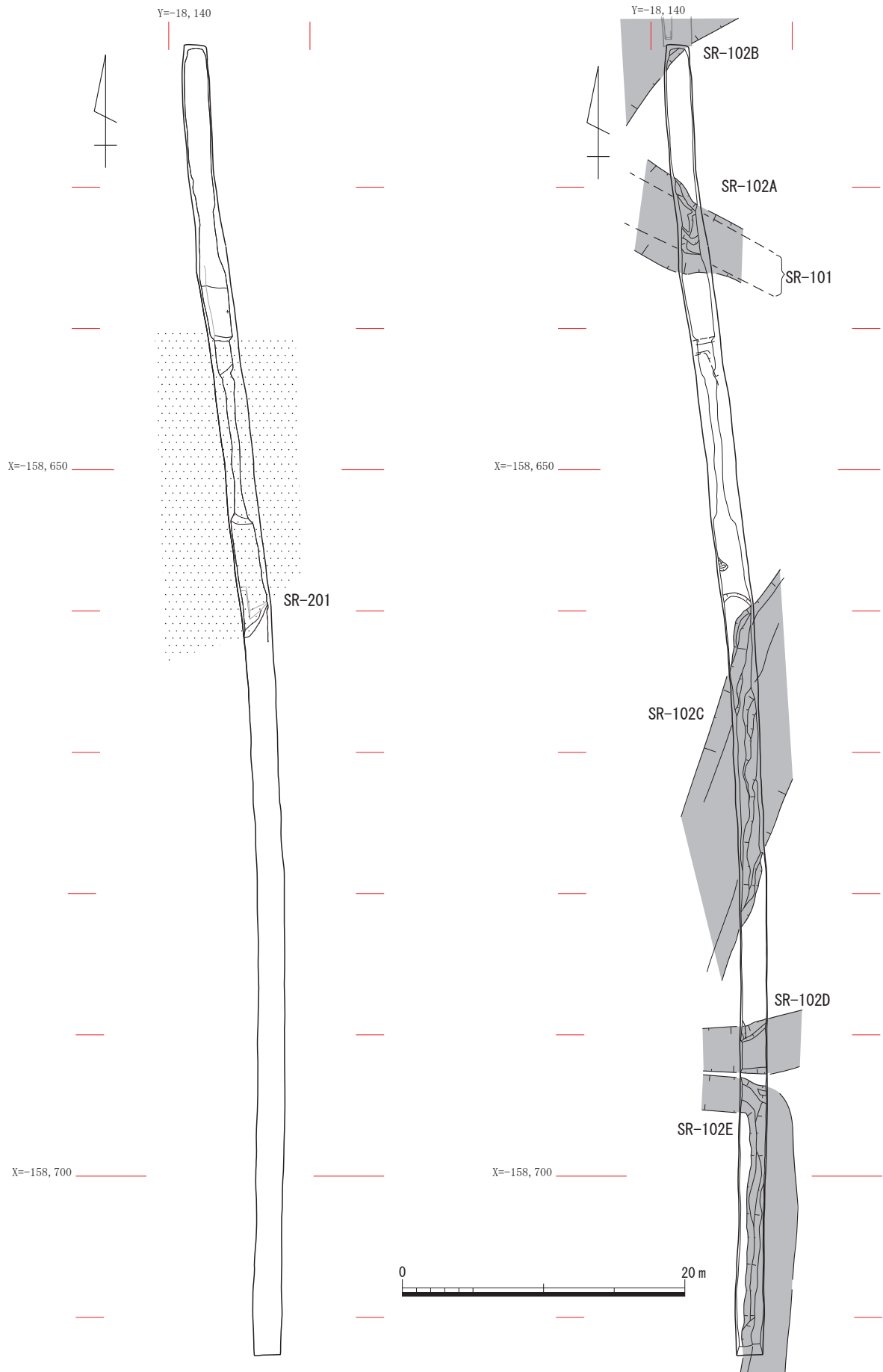
SR-102A 調査区北側で検出した溝状である。最深部の幅は約5m、深さは約1.5mである。ほぼ東西に流れるが、東端はやや狭い。最下層から大和第Ⅲ-1様式の土器片が出土している。中層では、南岸付近から大和第Ⅴ-1様式の細頸壺が完形で出土している（第19図23）。上層では同時期の高杯（第19図24）が出土している。古墳時代～古代の河跡SR-101もこの河跡の直上に存在することから、地形的な窪地となった可能性がある。

SR-102C 調査区中央付近で検出された北北東-南南西方向の溝状遺構である。幅は約7m、深さ1.0m。遺物はきわめて少なく、時期を特定できない。土器片転用円板1点が出土した。中層・下層は遺物をほとんど含まない粗砂堆積であるが、最下層は植物層で、人為的な溝（環濠）である可能性もある。

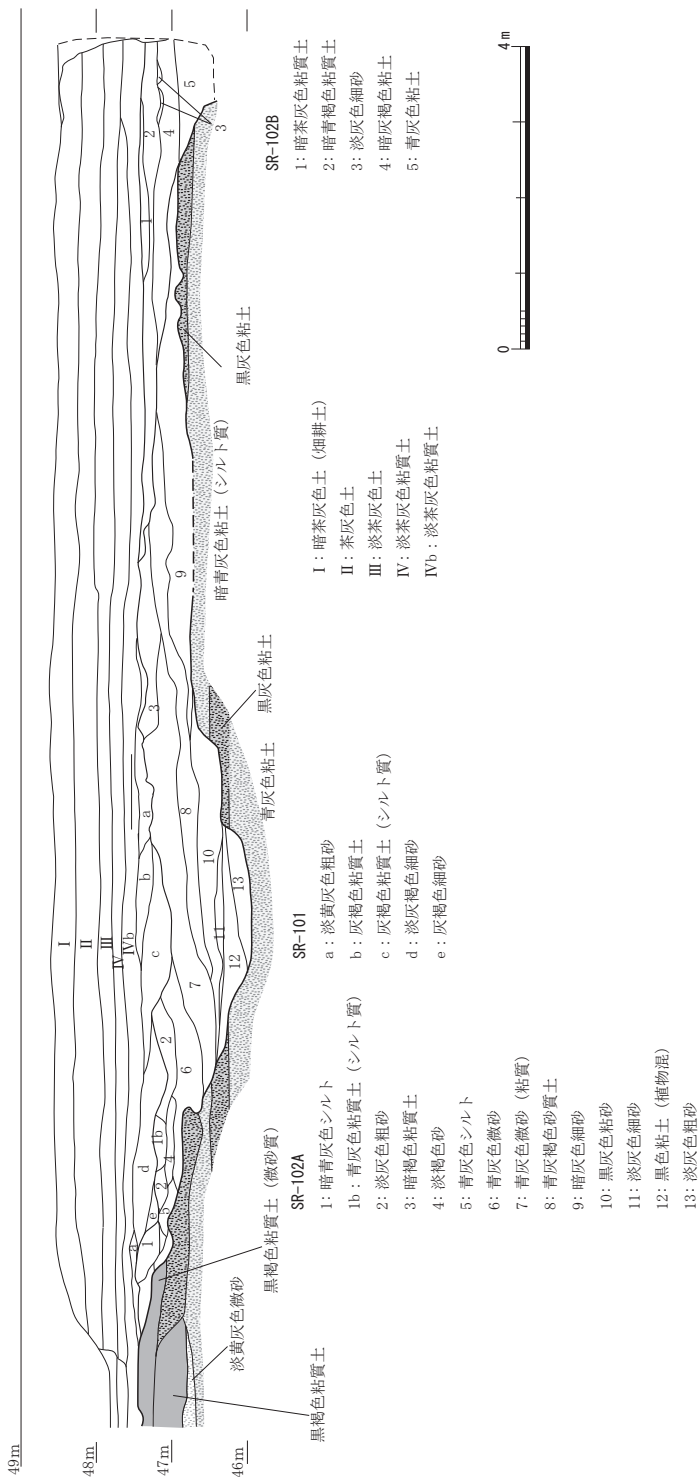
SR-102F II区北半で検出された遺構である。推定幅5m前後、深さ0.7m前後で、北々西に流れる。断面形状は逆台形で、1層は暗灰色粘砂が、第2層では淡灰色細砂が厚く堆積する。そして、最下層には植物層が堆積する。堆積状況から、SR-102Cと同一の遺構となる可能性もある。遺物は極めて少ない。

SR-102D I区南側で検出された東西方向の溝状遺構である。幅3.5m、深さ0.6mを測る。下層から弥生時代後期（第Ⅴ様式）の遺物が出土した（第19図26・27）。北肩付近でミニチュアの鉢（第19図25）が出土した。

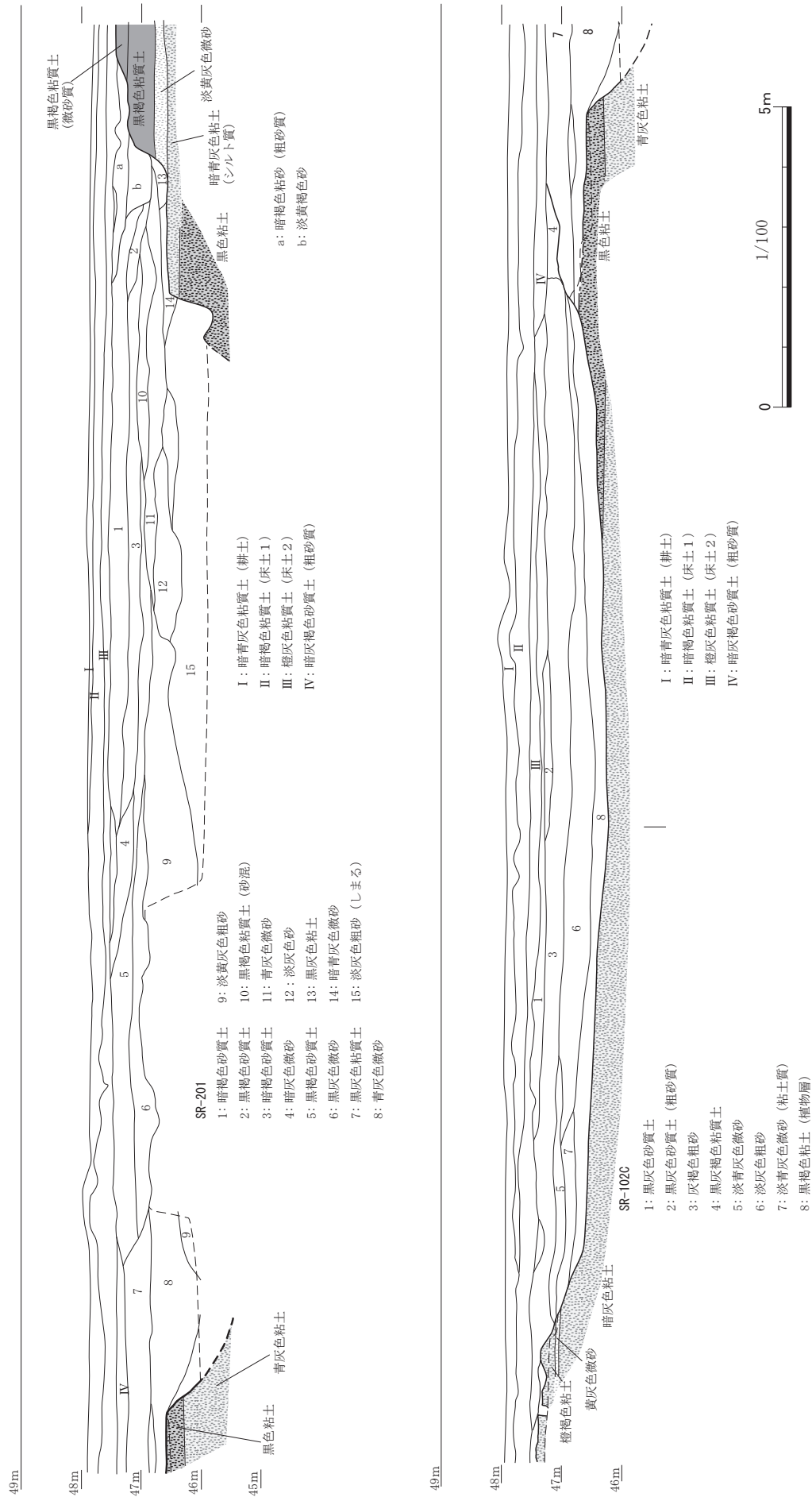
SR-102E I区南端～II区北端で検出された溝状遺構である。西肩のみが調査地の範囲にあっ



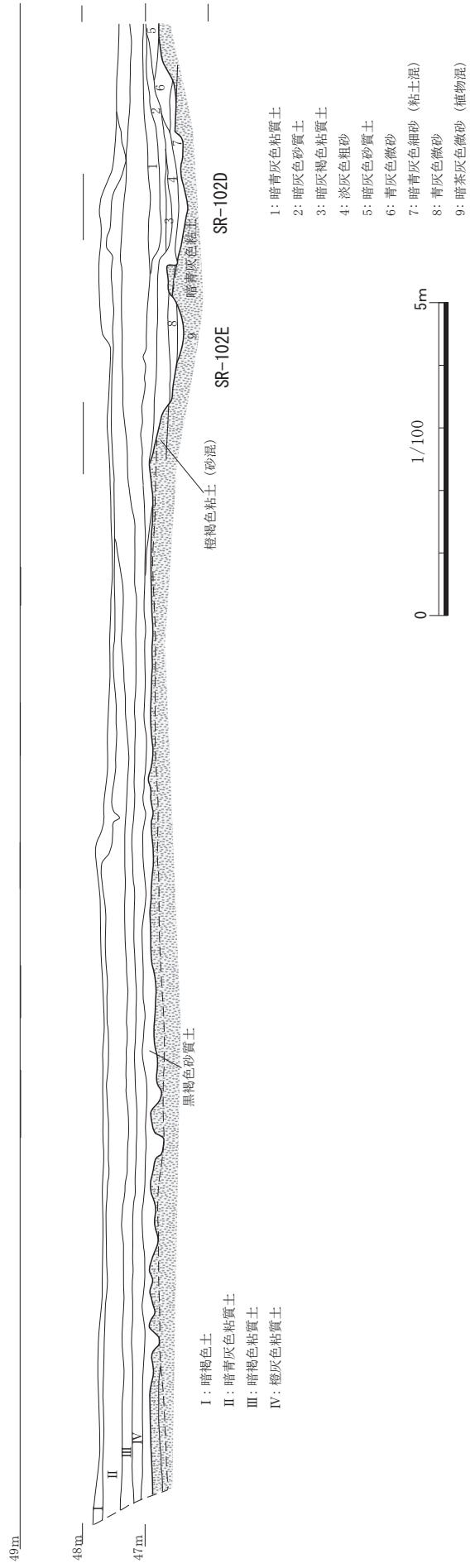
第10図 第1トレンチの遺構 (1/400)



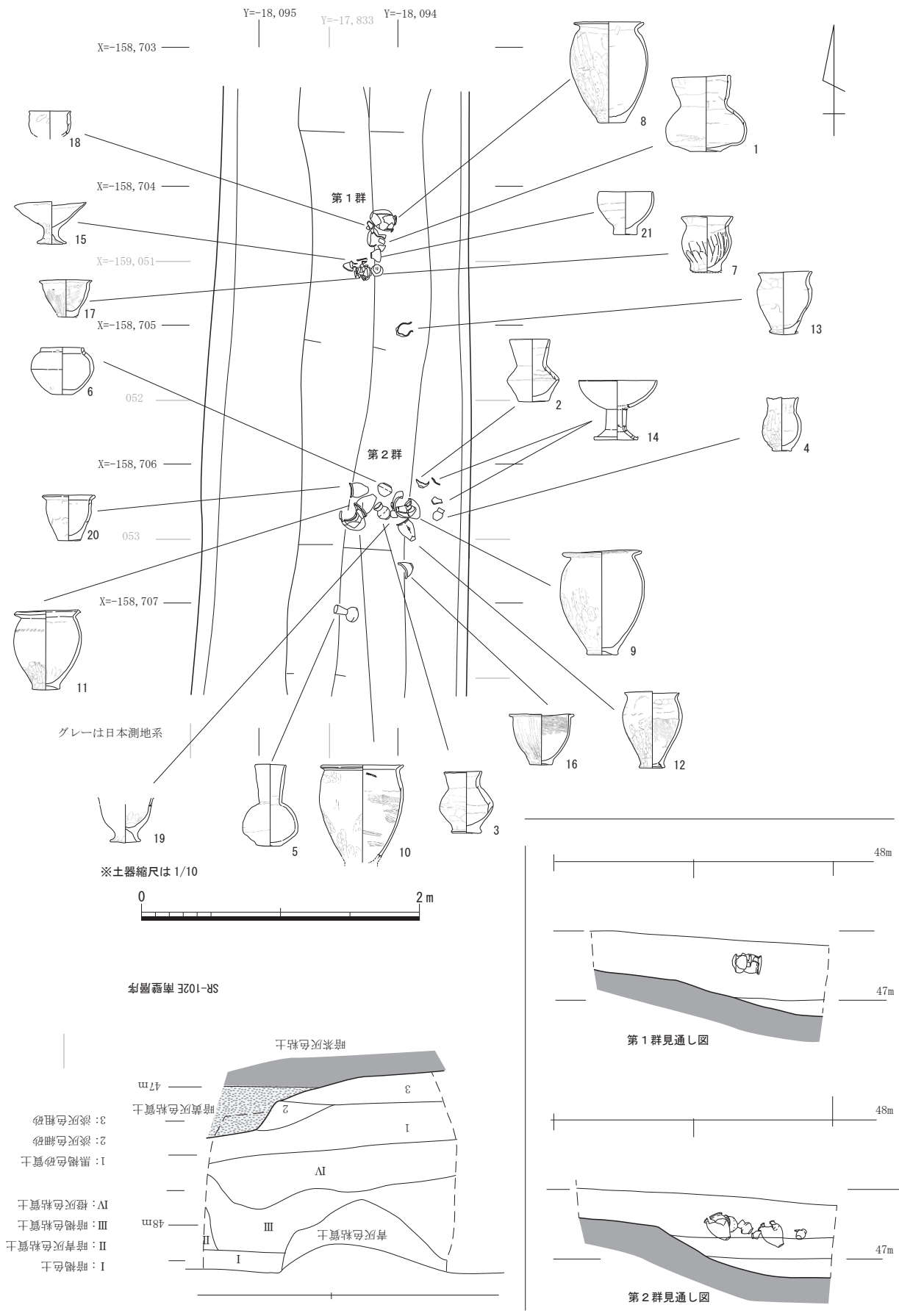
第 11 図 第 1 トレンチ SR-102A・102B 層序 (S=1/100)



第12図 第1トレンチ SR-102C・SR-201 層序 (S=1/100)



第13図 第1トレンチ SR-102D・102E 層序 (S=1/100)



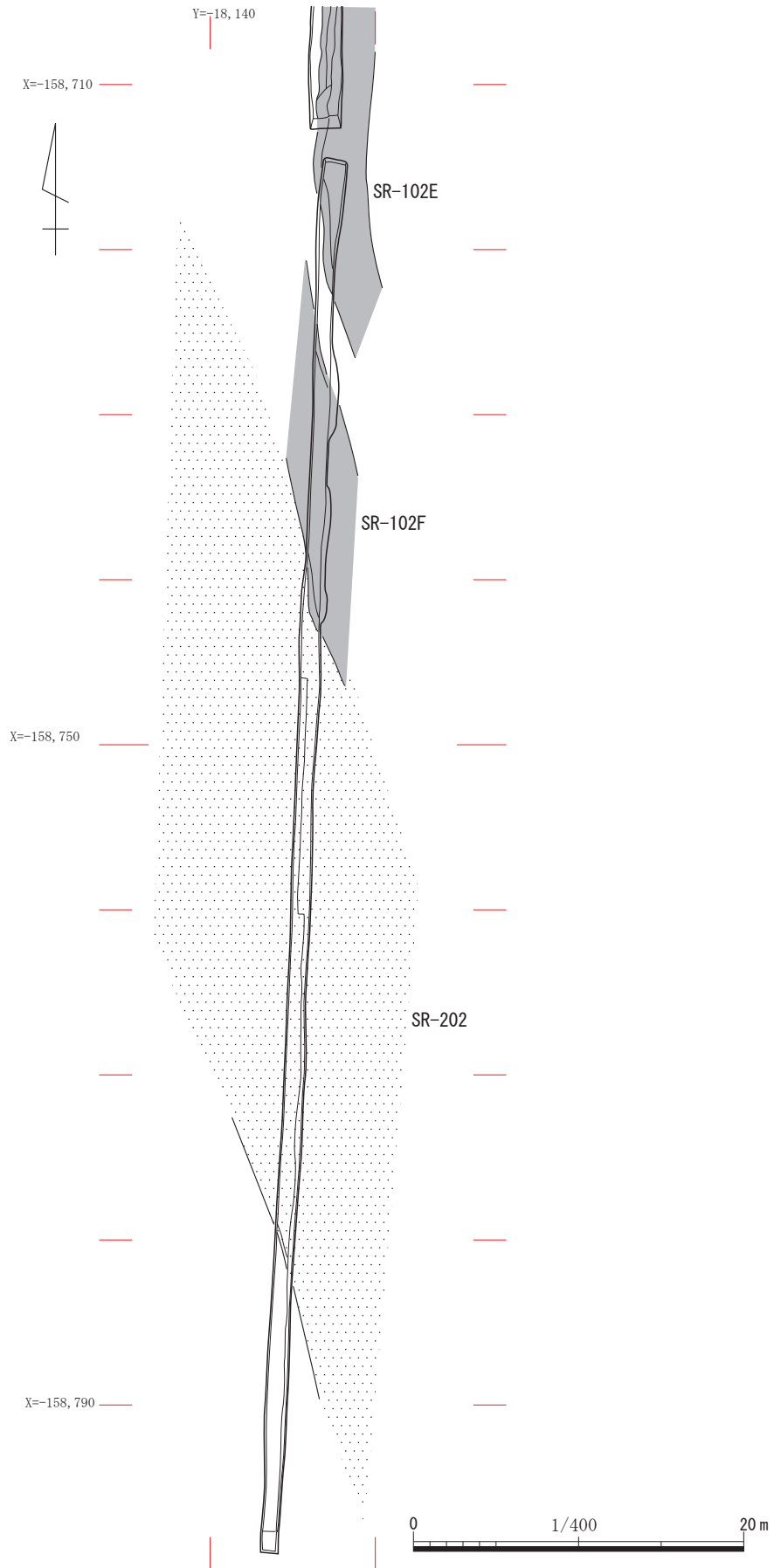
第14図 SR-102E 出土状況と層序 (S=1/40)

たため、主要部分の幅は不明である。基本的に南北方向であるが、SR-102D に接する北端付近で西に屈曲する。方形周溝墓の可能性も考慮したが、Ⅱ区北端で南南東方向に伸びるため、その可能性は低いと考えられる。Ⅰ区では、第1層の暗灰色粘砂から大和第Ⅴ-1様式の完形土器群が出土した(第18図)。ただし、Ⅱ区では遺物は全く出土していない。

この遺構で特筆されるのは第1層で検出された完形土器群で、半完形のものを含めその数は21個体にもおよぶ。2群に分かれて出土しているが、若干のレベル差があることから、多少の時間差を考えておきたい。第1群は粘砂層上位に分布し、7個体より成る。そのうち4個体(甕、壺、鉢、高杯各1個体)は整然と南北方向に並ぶ。底部が西を向き、口縁部が東を向いていた。並べて設置してあったものが同方向に倒れた結果のようにも見える。残る3個体のうち、2個体が小型の鉢である。1個体は北に口縁を向けて倒れ、1個体は口縁が上を向いていた。また、甕1個体は伏せた状態で出土している。この7個体の列からは40cmほど南にはずれるが、単独で出土している甕1個体もこの第1群に含めて考えたい。第2群は粘砂層下位に分布し、13個体から成る。第1群の南側1.5mにその中心がある。並び方には第1群ほどの規則性はないが、1m四方に収まる形で密集していた。甕が5個体、壺が5個体、鉢が1個体、高杯が1個体、器種不明の底部破片1個体で、いずれも小型品であった。

③古墳時代～古代

SR-101 SR-102Aの上層で検出された古墳時代後期～古代の河跡である。第27次調査の河跡とは一連のものとみられる。須恵器坏(第19図28)等が出土した。この他、調査地全体で古墳時代～古代の薄い砂層堆積が確認された。



第15図 第2トレンチの遺構 (S=1/400)



第16図 第2トレンチ北端の遺構と層序 (S=1/100)



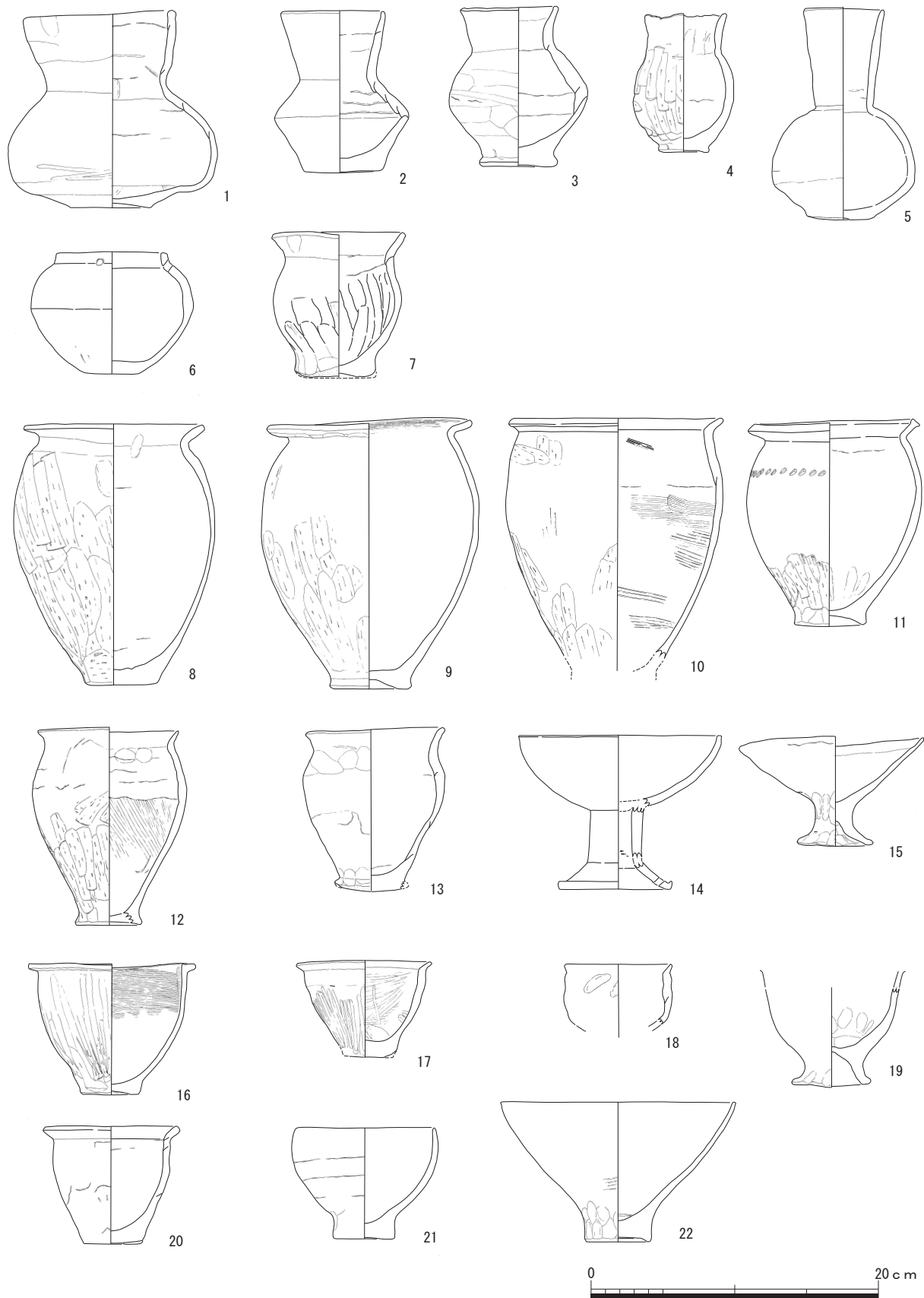
第17図 第2トレンチ 中央・南端層序 (S=1/100)

4. 出土した遺物

SR-102E 出土土器 (第 18 図)

1～5は壺である。1は胴部が自重で下膨れ状となっている。2・3はやや粗製の壺で、外面はナデ仕上げ、内面には明瞭な接合痕が残る。4も粗製の壺で、外面は縦方向のヘラ削りで

番号	器種	遺構	取上層位	法量 (cm)	色調	残存	調整・文様・他
1	壺	SR-102E	第1層	器高: 13.7 口径: 10.1 胴径: 14.5 底径: 5.5	淡茶灰色	ほぼ完形	外: ナデ、胴部最大径付近横位のヘラミガキ 内: ナデ。接合痕目立つ。
2	壺	SR-102E	第1層	器高: 11.3 口径: 6.8 胴径: 9.3 底径: 5.3	灰褐色		外: ナデ 内: ナデ。上半輪積みの接合痕明瞭に残る。
3	壺	SR-102E	第1層	器高: 11.0 口径: 6.3 胴径: 9.6 底径: 4.8	明灰褐色	完形	外: 横位のヘラミガキ 内: ナデ。接合痕目立つ。
4	壺	SR-102E	第1層	器高: 9.6 口径: 5.2 胴径: 6.9 底径: 3.3	暗橙灰色	完形	外: 胴部は縦方向のヘラ削り。口縁部ナデ。 内: ナデ
5	長頸壺	SR-102E	第1層	器高: 14.8 口径: 5.3 胴径: 9.9 底径: 4.0	淡灰褐色	完形	外: ナデ 内: 口縁部ナデ。胴部は不明。
6	無頸壺	SR-102E	第1層	器高: 8.5 口径: 7.6 胴径: 11.3 底径: 3.7	暗灰色		外: 残存不良で不明。ヘラミガキか。 内: ナデ
7	壺	SR-102E	第1層	(器高: 10.2) 口径: 9.0 胴径: 8.9 (底径: 5.0)	明褐色	半完形	外: 縦位のナデ (ミガキに近い) 内: 縦位のナデ (指跡明瞭に残る)
8	甕	SR-102E	第1層	器高: 18.2 口径: 12.4 胴径: 14.0 底径: 4.6	淡灰褐色	半完形	外: 縦位のヘラ削り、口縁ヨコナデ。 内: ナデ。内外面ともスス・炭化物の付着なし。
9	甕	SR-102E	第1層	器高: 18.7 口径: 13.7 胴径: 14.9 底径: 5.2	淡灰褐色	半完形	外: ナデ、胴部中位～下半縦位のヘラ削り。 内: ナデ。口縁横位ハケ。スス・炭化物の付着なし。
10	甕	SR-102E	第1層	(器高: 16.7+) 口径: 14.4 胴径: 15.6	暗褐色	半完形 底部欠損	外: ナデ、部分的なケズリ。焼成不良で底部溶解。 内: 横位ハケ。内外面ともスス・炭化物の付着なし。
11	甕	SR-102E	第1層	器高: 14.3 口径: 10.9 胴径: 12.3 底径: 4.7	橙灰色 黒斑部多し	完形	外: ナデ、胴部下縦位のヘラ削り、肩部列点文。 内: ナデ。内外面ともスス・炭化物の付着なし。
12	甕	SR-102E	第1層	器高: 13.7 口径: 9.6 胴径: 10.8 底径: 4.4	暗灰色	胴部下 欠損あり	外: ナデ、接合痕残る。下半は縦位のヘラ削り。 内: 下半縦位ハケ、上半指おさえとナデ。被熱なし。
13	甕	SR-102E	第1層	器高: 11.4 口径: 9.3 胴径: 9.9 (底径: 5.0)	淡灰褐色	完形	外: ナデ、底部付近指おさえ、接合痕あり 内: ナデ
14	高坏	SR-102E	第1層	器高: 10.6 口径: 14.0 脚径: 7.6	淡灰褐色		外: ナデ。表面風化。 内: ナデか。表面風化。
15	高坏	SR-102E	第1層	器高: 7.6 口径: 12.6 脚径: 4.9	赤褐色	半完形	外: ナデ。脚部指おさえ。 内: ナデ。
16	鉢	SR-102E	第1層	器高: 9.0 口径: 11.4 胴径: 10.4 底径: 3.8	淡灰褐色	完形	外: 縦位のヘラミガキ 内: 上半ヨコハケ、下半ナデ
17	鉢	SR-102E	第1層	器高: 6.7 口径: 9.2 胴径: 8.4 底径: 3.4	黒褐色	半完形	外: ナデ後縦位ヘラミガキ、焼成不良で底部溶解。 内: 黄位ヘラミガキ。口縁部付近は横位のナデ。
18	鉢	SR-102E	第1層	(器高: 4.1+) 口径: 7.2 胴径: 7.5	黒褐色		外: ナデ。一部指おさえ。焼成不良。 内: 横位のナデ。
19	鉢	SR-102E	第1層	(器高: 6.7+) 胴径: 9.1 底径: 5.3	黒褐色		外: ナデ。焼成不良。 内: ナデ、一部指おさえ。
20	鉢	SR-102E	第1層	器高: 8.2 口径: 9.0 胴径: 8.1 底径: 3.9	明褐色	完形	外: ナデ。接合痕残る。 内: ナデ。
21	鉢	SR-102E	第1層	器高: 7.7 口径: 9.4 胴径: 10.1 底径: 4.1	淡灰褐色	完形	外: ナデ。接合痕残る。 内: ナデ。工具痕? 残る。
22	鉢	SR-102E	第2層	器高: 9.7 口径: 16.1 底径: 4.4	淡灰褐色		外: ナデ。底部付近指おさえ、一部タタキ痕。 内: ナデか。表面風化。
23	長頸壺	SR-102A	第5層	(器高: 23.9+) 胴径: 15.4 底径: 6.1	褐灰色	半完形	外: 頸部縦位のヘラミガキ、胴部ナデ 内: 頸部横位ハケ後ナデ、内面ナデ? 工具痕残る
24	高坏	SR-102A	第5層	器高: 9.9 口径: 13.3 底径: 9.7	褐灰色		外: 脚部縦位のヘラミガキ、坏部ナデ? 表面摩滅 内: 坏部ヘラミガキ? 表面風化
25	ミニチュア鉢	SR-102D	第2(下)層	器高: 4.1 口径: 5.6 底径: 3.3	淡灰褐色	半完形	外: 縦位ナデ (荒い)。手づくねのミニチュア 内: ナデ
26	甕	SR-102D	第1(下)層 第3層	(器高: 6.3+) 口径: 10.4 胴径: 10.8	暗褐色		外: ナデ。接合痕残る。表面にスス付着。 内: ナデ。接合痕残る。下半に炭化物付着。
27	甕	SR-102D	第2層	(器高: 10.7+) 胴径: 9.9 底径: 4.4	灰褐色	口縁欠損 壺?	外: ナデ後、下半を縦位ヘラ削り。 内: ナデ、下半の一部ヘラ削り (掻取り状)
28	須恵器坏	SR-101	第1層	器高: 3.9 口径: 9.4	淡灰色	反転復元	外: 回転ナデ、底部回転ヘラ削り 内: 回転ナデ
29	須恵器坏蓋	II区南半	暗灰褐色 粘質土	器高: 4.6 口径: 12.0	淡灰色	反転復元	外: 回転ナデ、上部回転ヘラ削り 内: 回転ナデ



第 18 図 出土した遺物 (1) (S=1/4)

仕上げる。5は長頸壺で、この土器群では比較的丁寧なナデ仕上げである。6は無頸壺で、蓋用の紐孔が片側に1対みられる。7は粗製の壺である。焼成がやや不良で、底部付近は溶けかけている。

8～13は甕で、いずれもススの付着はみられない。8～10は器高18cm前後であるが、10は焼成が不良であるため底部付近の残存が非常に悪い。11は器高13.5cmの比較的小型な甕で、胴部に刺突列点文を施す。12も器高12.8cmの小型品である。13は器高11cmの粗製品である。14・15は高坏である。16～22は鉢である。18は全体の1/3程度が残存する。

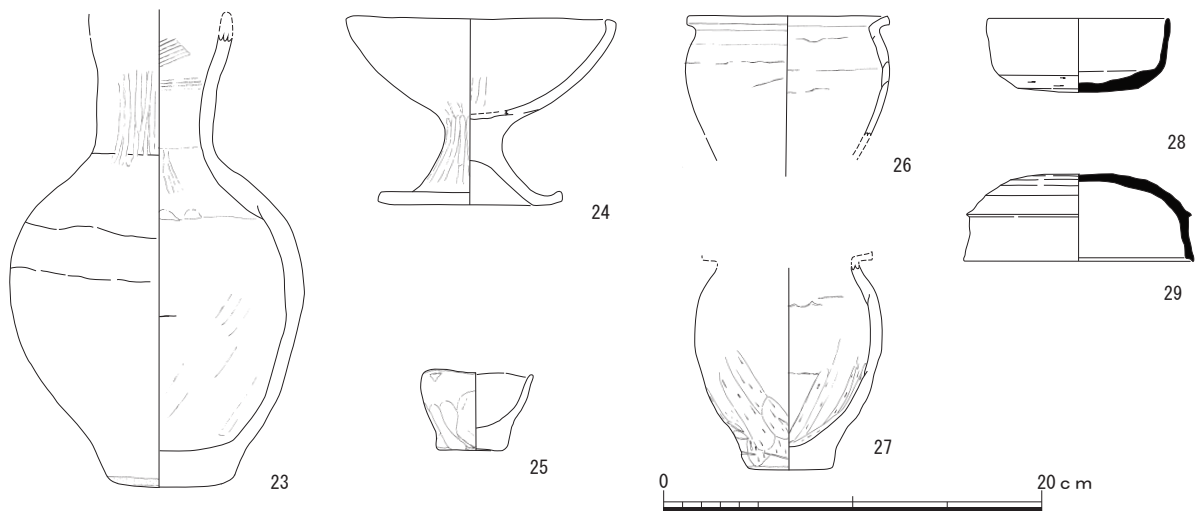
なお、これらの土器は、SR-102Eの上層から大きく2群に分かれてほぼ完形で出土している。北側の第1群は第1層中位から出土したもので、1・7・8・15・17・18・21の7個体から成る。南側の第2群は13個体から成り、第1層下位から出土した。このほか、13は第1群と第2群の間で出土している。完形品以外の土器片が僅少であったこと、甕に煤の付着がみられないこと、第1群のうち4個体が西側に底部を向けて並ぶように出土したことから、何らかの祭祀に伴う遺物である可能性が考えられる。また、これらの遺物の所属時期は大和第V様式であるが、この時期の甕の標準的な器高をみると、大型品が28～32cm程度、中型品が20～23cm程度であり、18cm以下のものは小型品となる。このことから、本土器群は壺も含め小型品の比率が異常に高いといえることができる。

SR-102A 出土土器 (第19図 23・24)

23はSR-102Aの南肩付近上層で出土した長頸壺である。口縁端部付近を欠失するが、ほぼ完形で出土した。24は高坏である。23に隣接して出土した。

SR-102D 出土土器 (第19図 25～27)

25はSR-102D下層から出土したミニチュアの鉢である。26はSR-102D下層から出土した甕である。全体に摩滅が進むが、内面に炭化物が付着し、外面に煤が付着する。27は甕または



第19図 出土した遺物(2) (S=1/4)

壺である。胴部内外面とも部分的なへら削りをおこなっている。

SR-101 出土土器（第 19 図 28）

古墳時代末～古代の流路から出土した須恵器坏である。TK217（7世紀前半）頃の遺物とみられる。

包含層出土土器（第 19 図 29）

第2トレンチ南半の古墳時代頃とみられる堆積層から出土した須恵器坏蓋である。TK47（6世紀初頭）頃とみられる。

IV. まとめ

今回の調査の結果、集落東端の様相についての情報を得ることができた。発掘調査終了後の見解では、調査地全体が環濠帯の外であり、一連の河跡によって形成された遺構群が広がるという理解に基づいて遺構名を決定した。古墳時代後期～古代の河跡を SR-101 とし、弥生時代後期初頭の河跡を SR-102 としたうえで、各流路を SR-102A～F と設定したのはこの解釈に基づく。そして、後期遺構に切られる大規模な河跡を第1トレンチ北半と第2トレンチ中央で確認したが、これらの遺構には遺物の出土がみられないため正確な時期は不明であるものの、弥生時代前期頃に遺跡中央付近に落ち込みが広がっていた頃のものとして解釈していた。

その後の調査の積み重ねの結果、これらの遺構が単純に河跡ではなく、現在の知見からすると大溝として理解すべき遺構が含まれることが判明してきた。特に、SR-102C は堆積土の大半が粗砂ではあるが、最下層に植物層を含むこと、断面逆台形の形状から人為的な遺構である可能性が高い。この場合、本遺構は幅7mの北北東―南南西方向の大溝となる。

また、後述する SR-102E は、出土した完形土器の多さと、北端が西へ直角に屈曲することから、方形周溝墓の可能性も考慮する必要があるが、第2トレンチではそのまま南南東に伸びていくことから集落外縁付近の人為的な溝と解釈するのが適当であろう。なお、SR-103E と北側に隣接する東西方向の溝状遺構 SR-102D は同時に開口していたとみられる堆積状況であり、耕地に伴う水路が集約されて SR-102C に注いでいたような状況が想定される。

今回の調査は集落外縁に相当するため、全体として遺物量は少なかったが、SR-102E の I 区南端で完形土器がまとまって出土している。この完形土器群は、いずれも小型品であり、甕も全て未使用のまま出土している。このことから、これらの土器は祭祀的要素の強いものであった可能性がある。これらの遺物は、何らかの祭祀に使用されたのかもしれない。また、SR-102A 中層南岸付近でも完形に復元できる壺、高杯破片が出土している。SR-102E と大差のない時期と見られ、この地点でも何らかの祭祀が行われた可能性がある。集落外縁付近に広がる洪水による粗砂で埋没した遺構群の遺物であり、治水のような意図があったかもしれない。

このように、今回の調査の結果、唐古・鍵遺跡の東端部分の状況を確認することができた。特に、集落東端での弥生時代後期初頭の祭祀の様相をうかがえたことは大きな成果であった。今後、集落域と水田域・河川氾濫原との地形的な関係をより詳細に確認していくことで、これらの遺構・遺物の位置づけが定まっていくであろう。



調査前（北から）



調査前（南から）



第1トレンチ表土掘削



第1トレンチ北端
SR-101・102A 検出状況（南から）



SR-101 完掘状況（東から）



SR-102E 出土状況
(東から)



SR-102E 北側土器群
(西から)



SR-102E 南側土器群
(東から)

図版 4



SD-102E 完掘状況
(南から)



SR-102E 南壁層序



SR-102D 西壁層序



SR-102D 完掘状況
(北から)



SR-102A 自然木出土状況
(東から)



SR-102A 北肩付近



SR-102A 南肩付近西壁



SR-102C 完掘状況（南から）



SR-102C 南肩付近西壁層序

图版 8



SR-102C 中央付近西壁層序



SR-201 南肩付近西壁層序



SR-201 北肩付近西壁層序



SR-201 北肩 遺物出土状況



SR-201 完掘状況（北から）



SR-102B 完掘状況
(東から)



第1トレンチ全景
(北から)



第1トレンチ全景
(南から)



SR-102E 第2トレンチ北端部
西壁層序



第2トレンチ SD-102E・102F
完掘状況
(北から)



SR-102F 北肩付近 西壁層序



SR-102F 中央付近 西壁層序



SR-102F 南肩付近 西壁層序



SR-102F 完掘状況
(北西から)



第2トレンチ全景
(北から)



第2トレンチ南端
西壁層序



第2トレンチ全景
(南から)



1



5



2



3



4



6



7



8



9



10



12



11



13



14



15



16



17



20



21



22



23



24



25



26



27

報告書抄録

ふりがな	からこ・かぎいせき だい56じはつくつちょうさがいほう							
書名	唐古・鍵遺跡 第56次発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名	田原本町埋蔵文化財調査概要							
シリーズ番号	14							
編著者名	清水琢哉							
執筆者名								
発行機関	田原本町教育委員会							
所在地	〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町大字阪手 233 番 1 TEL 0744-32-4404							
発行年月日	西暦 2022 年 3 月							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
からこ かぎいせき 唐古・鍵遺跡	ならけんしきぐん 奈良県磯城郡 たわらもとちょう 田原本町 おおあぎほうきじ 大字法貴寺 1085 番 2 東側道路	293636	11-A-0066	34° 34' 11.85"	135° 48' 9.78"	1994. 11. 17 ～ 95. 1. 25	330 m ²	通学路整備
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
唐古・鍵遺跡	集落	弥生 古墳	河跡	弥生土器、須恵器、 石器		遺跡東端の河川状の 遺構から祭祀に用い たとみられる完形土 器群が出土		

田原本町埋蔵文化財調査概要 第14集

唐古・鍵遺跡

第56次発掘調査概報

発行日：令和4年3月

発行：田原本町教育委員会

印刷：株式会社 明新社